

1. 構想の概要

【構想の名称】

トランスポーダー大学がひらく高等教育と世界の未来

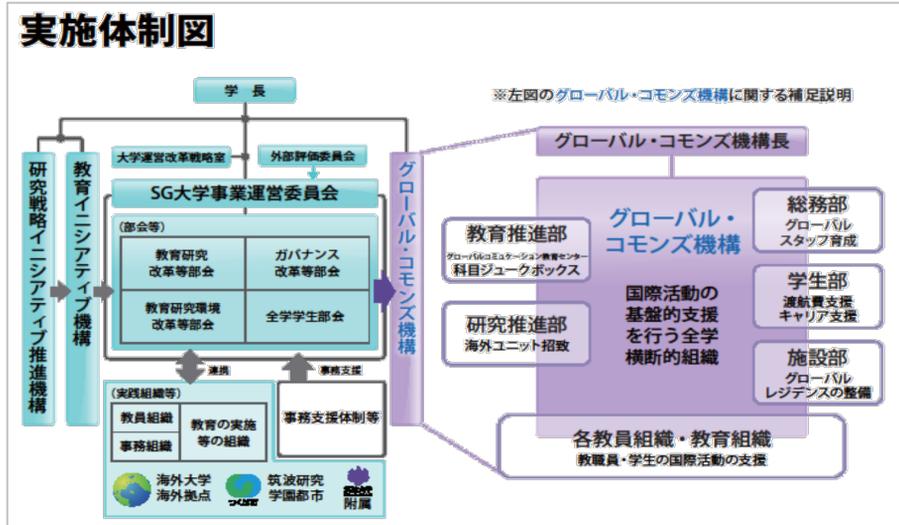
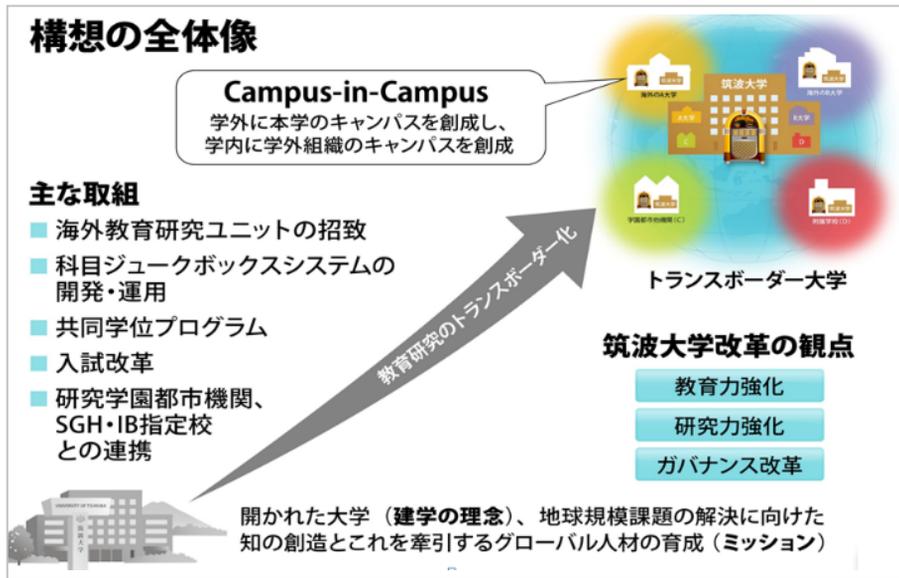
【SGUの取組を通じて目指す大学の将来像】

- 学生・教員・職員のモビリティを飛躍的に高め、誰もが国境や機関の壁を越えた武者修行に挑める大学。
- 国境や機関の壁を越え、世界中の資源を積極的に活用することにより、世界トップレベルの教育と研究を行う大学。
- 「内向き」とも評される我が国の高等教育と社会を世界に開き、率先して世界の未来を切り拓く大学

【構想の概要】

2023年までに13の海外パートナー大学内に本学のCampus-in-Campusを創成し、学内に13校のCampus-in-Campusを創成する。これによりパートナー大学と相補的、互恵的に教育研究資源を共有し、組織の壁や国境を越えて学生や教職員が自由に行き来できるトランスポーダーな環境を実現する。主な取り組みは下記の通り。

- ① 世界トップレベルの研究を行う海外の研究ユニットを本学に招致し、共同研究と本学学生の研究指導を実施する。
- ② 本学とパートナー大学が授業科目を出し合って「科目ジュークボックスシステム」を構築し、学生がどの大学からでも自校の科目として授業が履修できるようにする。
- ③ 科目ジュークボックスシステムを活用し、海外パートナー大学との共同学位プログラムを開設する。
- ④ 国際バカロレア特別入試、スーパーグローバルハイスクール指定校入試、4技能を問う外部英語検定試験などを全学的に導入し、グローバル志向の高校生を国内外から積極的に受け入れるとともに、こうした学生に対応した学位プログラムを整備する。
- ⑤ 筑波研究学園都市の研究機関、本学の附属学校、スーパーグローバルハイスクール、国際バカロレア指定校とも、海外パートナー大学と同様の連携体制を整える。



【10年間の計画概要】

1. Campus-in-Campus (CiC) の創成について

CiC構想は本学と海外の協定校及び本学と連携する産学官拠点のキャンパスを相互にキャンパス内に取込み、その中で本学とパートナー大学の学生、教員、研究者、職員が活動する研究教育環境を双方向で共有する仕組みである。従前の海外分校、交換留学、eラーニングや出張講義による授業共有とは異なり、実体的な環境下で常時、持続的かつ全学規模にわたる双方向の協働の場を展開するジョイントベンチャー型の取組みと言える。2023年までに13校のCiCを創成する。

2. 教育研究ユニット招致について

世界トップレベルの研究を行っている海外の研究室や研究チームを本学に招致し、共同研究ならびに本学学生の研究指導を行う。海外研究機関に勤める著名研究者をPI(責任指導教員)として本学でも雇用し(ジョイント・アポイントメント)、副PIは任期付き助教/准教授として本学に常駐する。スポーツ科学等の本学が強みを持つ分野については、本学の教育研究ユニットを協定校に設置し、双方向の協働を促す。教育研究ユニットが提供する科目を科目ジュークボックスに取組むことにより、最先端の研究に触れ指導を受ける機会を学生に提供する。2023年までに延べ9ユニットを招致する。

3. 科目ジュークボックスシステムについて

科目ジュークボックスシステムは、本学及び海外の各パートナー大学がそれぞれの在学学生ならびにパートナー大学の学生が履修可能な授業を指定し、「ジュークボックス」のように共通のナンバリングに基づいて科目一覧、シラバスを掲載し、いずれの大学から提供された科目も自分の大学の科目として学生が履修できるシステムである。成績評価および単位認定は、科目提供側から示された成績評価をもとに、その学生が本来所属する各大学において行う。2023年までに13校のCiCから科目ジュークボックスに500科目を登録し、本学とパートナー大学の学生に提供する。

4. 科目ジュークボックスを活用した共同学位プログラムについて

CiCのパートナー大学と科目ジュークボックスシステムを活用した双方向学生交流を推進する。2023年までに科目ジュークボックスを活用して学位を取得できるコースを12コース開設する。

5. 入試改革及び学位プログラムの新設について

国際バカロレア特別入試、スーパーグローバルハイスクール指定校入試、4技能を問う外部英語検定試験などを全学的に導入して、グローバル志向の高校生を国内外から積極的に受け入れるために、2023年までに外国語による科目数を全授業科目数全体の33%(学群・大学院の合計)とするとともに、外国語のみで卒業できるコースの設置数を全卒業コースの設置数全体の28%とする。

6. 国内機関との連携について

連携する筑波研究学園都市の機関や企業もCiCの場として、研究学園都市全体を巻き込んで展開する。これにより街全体の「国際性の日常化」を推進する。また、附属学校ならびに研究学園都市市内のスーパーグローバルハイスクール(SGH)、スーパーサイエンスハイスクール(SSH)指定校にも科目ジュークボックスを一部開放し、中等教育の国際化・高度化に寄与するとともに、高大連携による教育プログラム実施の基盤として活用する。

【特徴的な取組(国際化、ガバナンス改革、教育改革等)】

- ①柔軟で多様な人事制度の構築とすぐれた教職員の確保・育成を目指し、主に外部資金によって任用される教員を対象に年俸制の更なる拡大を図り2023年までに全専任教員数に占める年俸制適用教員数の割合を40%とする。
- ②日本人、外国人を問わずに学生と教職員が世界の一員であることを日常的に実感することができる「国際性の日常化(語学力維持・向上)について(基本方針)」に基づき、職員が外国語によって留学生や外国人教員とのコミュニケーションが図られるよう2023年までに全専任職員数のうち、外国語基準(TOEIC500点)を満たす専任職員の割合を37%とする。
- ③入学者選抜方法については、GTEC-CBT、TOEFL、TEAP等の英語4技能(読む、聞く、書く、話す)を問う外部英語検定試験を全学的に導入することを2015年3月に公表し、2017年2月実施に向けて教育組織ごとに導入形態等を決定することとしているが、2023年までにはすべての学群入学定員数に対してTOEFL等外部試験の入試への活用を図る。

【海外の大学との連携の推進方策】

すでに国立台湾大学、ボルドー大学、カリフォルニア大学アーバイン校がCampus-in-Campus構想への参画を表明しており、今後さらなる拡充に向けて、複数の大学と協議中である。今後は、本学が有する12か国・地域13か所(ドイツ、フランス、ベトナム、インドネシア、マレーシア、中国、チュニジア、ウズベキスタン、カザフスタン、アメリカ、ブラジル、台湾)の海外拠点(オフィス)と海外協定校(2015年5月現在、60か国・地域、299の大学・研究所・国際機関と交流協定を締結)を軸にパートナー大学の拡充を図りながら、パートナー大学と相補的、互恵的に教育研究資源を共有し、組織の壁や国境を越えて学生や教職員が自由に行き来できるトランスボーダーな教育研究環境の実現を図る。

2. 取組内容の進捗状況(平成26年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. 海外教育研究ユニットの招致

人文社会系海外教育研究ユニットとして、ハンブルグ大学アジア・アフリカ研究所インド学チベット学研究所の研究者を招致した。また、医学医療系海外教育研究ユニットでは、分子細胞生物学の世界的権威であるライデン大学メディカルセンター分子細胞生物学研究室から研究者を招致して、共同研究を実施した。

2. Campus-in-Campus (CiC)の教育研究環境整備

海外3大学(国立台湾大学、ボルドー大学、カリフォルニア大学アーバイン校)にCiCを開設する準備を整えた。また、平成27年2月に上述3大学との実務者ミーティングを開催して、CiCを実現する上での必須条件について検討を行い、協定内容を具体化させた。

3. キックオフシンポジウムの開催

平成27年2月に「大学の〈グローバルプレゼンス〉を考える」と題するキックオフシンポジウムを開催し、CiC構想を中心とした本事業における本学の取組みと意義を広く社会に普及する活動を行った。

具体的には、パートナー大学(国立台湾大学、ボルドー大学、カリフォルニア大学アーバイン校)を含む国内外の有識者を招き、講演及び公開討論を開催した。これを通して日本の高等教育機関がグローバル社会におけるプレゼンスを高めるために今何をすべきかについて意見を交わし、問題意識の共有と強固なネットワークの構築を図った。

併せて、外部評価委員会を開催し、国内外の有識者から本学の取組みに対するレビューを受けた。



〈キックオフシンポジウムで構想を説明する永田学長〉

ガバナンス改革関連

1. スーパーグローバル大学事業推進室の設置

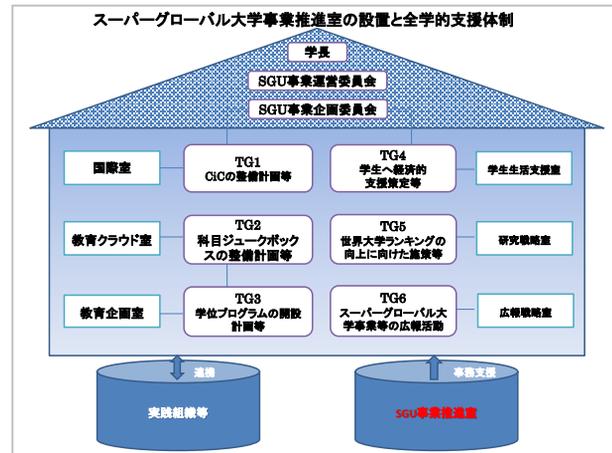
平成26年10月1日にスーパーグローバル大学事業準備室を改めスーパーグローバル大学事業推進室を設置した。室長及び職員2名を配置し、本事業の全学的な支援を開始した。

2. 言語教育の充実に向けた体制整備

外国語センターと留学生センター日本語教育部門の機能強化を統合した新センターであるグローバルコミュニケーション教育センターの設置準備(平成27年4月設置)を行った。これにより、日本人学生と外国人留学生がグローバル化に対応した語学力とコミュニケーション能力身につけるための体制整備を行った。

3. 外国人教員を積極的に採用

教育研究ユニット招致等により海外教育研究ユニット教員を採用した。



教育改革関連

1. 科目ジュークボックスシステムの構築

科目ジュークボックスシステムの構築に向けて準備を行うとともに、本学からジュークボックスに提供可能な科目について精査した(精査された科目は平成27年度中にウェブで公開予定)。

また、上述のパートナー大学との実務者ミーティングにおいて、海外からもジュークボックス科目に科目が提供されることの確認を行った。

2. 新たな教育プログラムの開発

地球規模課題に取り組むセンスとスキル、課題解決型学修(PBL)、海外留学、Late specializationを基軸とした「オールラウンド型学士学位プログラム」、主に外国人学生を対象とし、高い日本語運用能力と日本社会・文化の深い理解を基盤に、芸術、ケアサイエンス、日本語教育、農業分野の専門性を身につけさせる「ジャパン・エキスパート学士学位プログラム」の開設に向けて、プログラムの趣旨、コーディネータ教員の配置、カリキュラム編成、事務体制や準備委員会設置のための検討を行った。

3. グローバル入試の実施

グローバル人材育成強化のため、国際バカロレア特別入試を実施した。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. Campus-in-Campusの数について

国立台湾大学(NTU)、ボルドー大学(UOB)、カリフォルニア大学アーバイン校(UCI)の3大学にCampus-in-Campusを開設する準備を整えるため、関係者との実務者ミーティングを行った。

2. 科目ジュークボックスの科目数について

本学で提供可能なジュークボックス科目として、学群70科目、大学院67科目の合計137科目を精査し、平成27年度に公開を予定している。

3. 外国人留学生の正規生の人数について

本学独自の奨学金や留学生後援会による支援事業を実施し、留学生の正規課程入学者の獲得を図った。



国立台湾大学筑波大学オフィスでCiC連携について打合せを行う
(左からUCIのDr.Lander, 筑波大学の大庭准教授, NTUのDr.Lee)。

■ 国際的評価の向上につながる取組

1. 教育による国際的評価の向上

国際的互換性を有する学位プログラム制への移行を開始し、国際就業力をもつグローバルイノベーション人材を輩出する新たな学位プログラム(オールラウンド型学士課程プログラム、ジャパン・エキスパート学士プログラム)の開設に向けてコアメンバーによる検討を行い、開設準備室の設置準備を行った。

また、日本語版チューニングシステムの構築に向け、チューニングプロジェクト事業推進委員会を設置し、専任教員の採用準備及び支援スタッフの採用、国内外の教育システムや欧州のチューニング制度に関する情報収集、FD研修会の開催等、チューニングの調査・研究に係る基盤を整備した。

さらには、国際バカロレア特別入試を含むグローバル入試を実施した。

2. 研究による国際的評価の向上

国際的に卓越した研究として、国際統合睡眠医科学研究機構、サイバニクス研究センター、藻類バイオマス・エネルギーシステム研究拠点、生命領域学際研究センターにおいて各分野の研究を推進した。

研究力の重点的な強化策として、研究戦略イニシアティブ推進機構による重点研究センターや学術センター等の支援及び国際テニュアトラック等の実施、海外教育研究ユニット招致制度の新設等を実施した。

基盤的な強化策として、リサーチ・アドミニストレーター増員、承継職員化及び部局配置、産業総合研究所と筑波大学の合わせ技ファンドや特別共同研究事業の創設などのほか、オープンファシリティー推進室による先端研究機器の供用化を推進した。

3. ガバナンス改革

学長のリーダーシップにより資源配分の面では、平成27年度の予算方針を「部分最適」から「全体最適」へシフトするとともに、人事面では、新たな若手・女性・外国人の3要件を満たす教員の増加を目的に、全学戦略枠を配置した。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

Campus-in-Campus(CiC)構想の実現に向けて、重点校である国立台湾大学(NTU)内に筑波大学台湾オフィスを、カリフォルニア大学アーバイン校(UCI)内に筑波大学アーバインオフィスを、サンパウロ大学(USP)内に筑波大学サンパウロオフィスが開設されたことを受け、NTU、UCI及びUSPから代表者を招き、筑波オフィス(相互オフィス)の開所式を行い、さらなる相互交流の拠点となることが期待される。

また、平成27年3月には本学サンパウロ事務所を設置し、現在申請中の平成27年度大学教育再生推進費「大学の世界展開力強化事業～中南米等との大学間交流形成支援～」と連携しながら、CiC構想の中南米地域への拡大に向けた準備を整えた。

■ 自由記述欄

1. スーパーグローバル大学事業ショーケースの開催

2015年2月15日に本学キックオフシンポジウムの一環として、採択大学を対象としたショーケースを実施し、参加29大学の構想を紹介することで国内外の大学関係者や有識者等との情報共有と意見交換の場とするともに、本学のみならずSGU事業採択大学の意義と各大学の取組みについて、社会に発信する機会を提供した。



〈スーパーグローバル大学事業ショーケースで参加大学の構想を紹介〉

3. 取組内容の進捗状況(平成27年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. Campus-in-Campus(CiC)の教育研究環境整備

平成27年9月30日にボルドー大学(UBx)及び国立台湾大学(NTU)とCiCに関する協定の調印式が執り行われた。

また、筑波大学内にOverseas Commons(CiC Tsukuba Office)として、今後協定締結を予定しているカリフォルニア大学アーバイン校(UCI)及びサンパウロ大学を含む4大学のオフィススペースが設置された。開所式にはUBxからManuel Tunon de Lara学長、NTUからLuisa Shu-Ying Chang副学長、UCIからJames W. Hicks副学長が出席して記念のテープカットが執り行われた。



2. グローバルレジデンス整備事業

グローバル人材育成及び「国際性の日常化」を促進し、日本に居ながら異文化交流ができる住環境を提供することが本事業の目的である。この目的の達成に向け、平成27年8月にPFI事業者(つくばグローバルアカデミックサービス(株)、母体は大和リースグループ)と契約を結んだ。これにより、キャンパス内の宿泊施設が段階的に拡張され、日本人学生の留学生との交流がいっそう促進されるのみならず、留学生の受入数拡大に向けた環境が整備される。本計画の皮切りとして、平成28年4月に短期留学・ショートステイ宿舎(354室)の運用を開始する。

3. CiC実務者会合の開催

CiC構想の実現に向け、平成27年9月にボルドー大学、国立台湾大学、カリフォルニア大学アーバイン校及び本学の関係者が一堂に会して、CiCオフィス及び科目ジュークボックスの運営方法と今後の具体的な進め方について議論を交わした。

ガバナンス改革関連

1. 大学戦略室の設置準備

大学戦略室は、10年後の国立大学を取り巻く状況を確認し、国立大学政策の動向、国立大学個々の財政運営に大きな影響を与える施策、方針等を予測しながら、世界レベルの研究大学としての戦略モデルを模索することを目的として、平成28年4月の設置を目指している。平成27年度は、4月に担当の大学執行役員を任命した上で、同室の設置に向けた規定整備及び予備検討を行った。

2. 全学年俸制教員評価の実施

平成26年10月に年俸制を適用する大学教員の業績評価を実施するための「全学年俸制教員評価実施委員会要項」を定め、平成27年度に初めて全学の年俸制教員評価を実施(対象者102名)し、評価結果を年俸に反映させた。

3. 事務職員の高度化の取組

事務職員の語学力向上を目指し、「レベル別英会話研修」、「留学生による英語チューター研修」、「eラーニング英語研修」を実施したほか、TOEIC受検者に受検料の補助を行った。

また、語学力水準の高い事務職員を対象として、海外での短期研修や学内留学生対応部門における実務研修を経験させるなどして、事務職員の高度化に向けた支援を行った。

併せて、グローバル人材を求める経済界からの要請、アジア英語の認知度向上など、英語を取り巻く環境変化に関する特別セミナーを開催した。

教育改革関連

1. 科目ジュークボックスシステムの構築

科目ジュークボックスは、筑波大学と海外のCiCパートナー大学において学生が履修可能な授業科目を音楽のジュークボックスのように選択することを可能にするウェブシステムで、平成28年3月に公開された。現状では本学側で提供する約100科目が掲載されており、平成28年度には海外パートナー大学の科目も追加される予定である。

2. 新たな教育プログラムの構築

「Japan-Expert(学士)学位プログラム」は、日本の文化・社会を理解し、日本マインドを持った留学生の育成を目的として、4コース(アグロノミスト養成コース、ヘルスケアコース、日本芸術コース、日本語教師養成コース)を開設する。平成28年10月の学生受入れを目指し、平成28年3月に学生募集を開始した。

3. グローバル入試の実施

グローバル人材育成強化のため、私費外国人留学生入試(志願者124名/入学者23名)及び国際バカロレア特別入試(志願者13名/入学者3名)を実施した。

Japan Expert Program 入学者募集!

日本で暮らしたい、日本で学びたい、日本で働きたい。スペシャリストを育成する4つのコース

- アグロノミスト養成コース**
農産物の生産から消費まで、食料の安全・食料の安心を実現するためのグローバルな視点で農産物の生産・流通・消費を学ぶ。
- ヘルスケアコース**
高齢化が進む日本社会で、高齢者の健康・生活の質を向上させるための専門知識・技術を学ぶ。
- 日本芸術コース**
日本の伝統文化・現代文化を深く理解し、国際的に活躍できる人材を育成する。
- 日本語教師養成コース**
日本語を母語としない外国人留学生の日本語教育に貢献する専門知識・技術を学ぶ。

スケジュール
2018年4月1日(水)～2018年4月11日(水) 入学式
2018年10月1日(土)～2018年10月11日(土) 入学式
2018年10月11日(土)～2018年10月12日(日) 入学式

入学者半額奨励的に入学金を減額します

筑波大学 University of Tsukuba

■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. Campus-in-Campusの数について

国立台湾大学及びボルドー大学の2大学とCampus-in-Campusに係る包括協定を平成27年9月30日に締結した。

カリフォルニア大学アーバイン校とは条件面での折衝に時間を要したため、平成28年4月に締結を予定している。

2. 科目ジュークボックスの科目数について

本学で提供可能なジュークボックス科目として約100科目をジュークボックスシステムに掲載し、平成28年3月15日に公開した。

平成28年度には海外パートナー大学から提供される科目も掲載される見通しである。



〈科目ジュークボックスシステムのトップページ〉

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. つくばグローバルサイエンスウィーク2015(TGSW2015)の開催

「つくばグローバルサイエンスウィーク2015 (TGSW 2015)」は、今年で6回目を迎え、世界25か国、90機関から200名近い発表者と、1,200名を超す来場者を迎え、9月28日から30日に3日間、つくば市内で行われた。

会期中、メインセッションのひとつである「つくば国際スポーツ科学アカデミー(TIAS)」を中心に企画実施された「オリンピック・パラリンピック・ムーブメントへの参画」や、第1回海外同窓会ネットワーク年次総会も併せて実施した。

また、つくばの地に結集した研究者コミュニティによる地球規模課題の克服への決意、多様性や平等の尊重、ならびに人と自然との共生といったオリンピック・パラリンピック・ムーブメントの理念との通底する価値観を共有する次世代の人材育成に対する誓いとして、「TSUKUBA2015」を公表して全日程を終えた。



TGSW2015開催中の様子

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

平成27年度には、研究重点型ユニットとして「Aarhus大学センター研究室(デンマーク)」(数理物質系)及び「Plymouth大学海洋酸化性・国際海洋フィールド学研究室(英国)」の2ユニットを、教育重点型ユニットでは本学の数理物質科学研究科とダブルディグリープログラムの開設を目指してグルノーブル大学(フランス)から招聘した(～平成31年度)。

これにより、平成26年度から平成30年度まで3ユニット、平成27年度から平成31年度まで3ユニットの6ユニット招聘に至り、平成28年度末までに到達予定の6ユニットに1年前倒して達成した。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

ロ スーパーグローバル大学事業に係る学生支援制度の整備

本学独自の奨学金制度である「筑波大学海外留学支援制度(はばたけ! 筑大生)」を発足させ、海外学会等参加支援プログラム(203名)、国際交流協定交換留学支援プログラム(6名)によって日本人学生の海外留学機会を拡大するとともに、平成28年度からは新たにCiCパートナー大学との交流に基づく奨学金支援プログラムを開始して、CiCとの交流を促進するための環境を整備した。

また、学生の危機管理体制を一元管理することを目指し、オンラインによる「海外渡航届」システムを導入した。これにより、海外での災害・テロ・感染症発生等の緊急事態が発生した際、当該地域へ渡航している学生の安否確認を迅速に行うことに寄与した。

筑波大学海外留学支援事業の平成27年12月期募集

はばたけ!

筑大生

① 国際交流協定校 交換留学支援プログラム

- ・ 募集: 海外の大学等との間で締結された学生交流協定に基づく留学
- ・ 活動: 6か月以内(平成28年4月～平成29年3月)
- ・ 旅費の支援: 滞在費の一部として月額上限6万円

② キャンパス イン キャンパス(CiC)等 支援プログラム

- ・ 募集: デュアルディグリープログラム(DDP)を実施する大学との間で締結された覚書に基づき、海外の大学で学修、調査・研究を行う
- ・ 期間: 平成28年4月～平成29年3月
- ・ 旅費の支援: 上限15万円
- ※ キャンパス イン キャンパス(CiC)は4月期募集の予定

③ 海外武者修行 支援プログラム

- ・ 4月期募集予定

④ 海外学会等参加 支援プログラム

- ・ 募集: 海外で開催される国際学会、セミナー、シンポジウム、研究会等へ出席し、研究発表を行う
- ・ 活動: 2週間以内(平成28年4月～6月)
- ・ 旅費の支援: 上限15万円

⑤ 語学研修等参加 支援プログラム

- ・ 4月期募集予定

申請〆切: 平成28年2月24日(水)

申請書提出先: 各支援室

対象: 学群または大学院の正規課程に在籍する者。

問合せ先: 学生新学交流課(内線6067)

詳細は募集要項を参照してください。

URL: <http://www.tsukuba.ac.jp/global/scholarship.html>

予告: 平成28年7月以降の連続については、5つの支援プログラム全てを平成28年度4月期募集としてあらかじめ募集する予定です。ポータルページを注視してください。

4. 取組内容の進捗状況(平成28年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. Campus-in-Campus (CiC) 協定校の拡大

新たなCiC協定校として、サンパウロ大学、マレーシア工科大学、カリフォルニア大学アーバイン校とCiC協定を締結するとともに、平成28年9月に開催されたTsubu Global Science Week (TGSW)においてCiC運営委員会およびCiC実務者会合を開催した。

これにより、CiCの対象となる国・地域が2.5倍に増えるとともに、CiCの枠組みにおける学生・教職員・研究者等の交流が一層拡大することが期待される。

(CiC協定校一覧：累計5校)

- ・ サンパウロ大学 (H28.9～)
- ・ マレーシア工科大学 (H28.9～)
- ・ カリフォルニア大学アーバイン校 (H28.4～)
- ・ 国立台湾大学 (H27.9～)
- ・ ボルドー大学 (H27.9～)



TGSWでの調印式 (H28.9)

2. グローバル・ヴィレッジのオープン

日本人学生と外国人留学生が混住するルームシェア型の学生宿舎の施工を3月に完了(310室)し、グローバル・ヴィレッジとしてオープンした。

なお、グローバル・ヴィレッジは、大和グループとのPFI事業として新築したもので、平成30年4月にはさらに190室が増設される予定である。



グローバル・ヴィレッジ

ガバナンス改革関連

1. 筑波大学スーパーグローバル大学事業外部評価委員会の開催

平成28年9月、筑波大学スーパーグローバル大学事業外部評価委員会を設置し、平成29年2月に外部有識者で構成される5名の委員からヒアリングを実施した。ヒアリングの結果、本事業による大幅な国際性の増大やトップマネジメントによる事業運営等について高い評価を受けるとともに、今後の事業改善に資する数多くの建設的な助言を得ることができた。

2. グローバル・スタッフの育成

グローバル・スタッフ育成室による各種英語研修・SDセミナー等を強化(H28参加実績：述べ400人)するとともに、短期海外業務研修等によりCiC協定校を含む海外の大学等へ職員を派遣した(H28派遣実績：12人)。

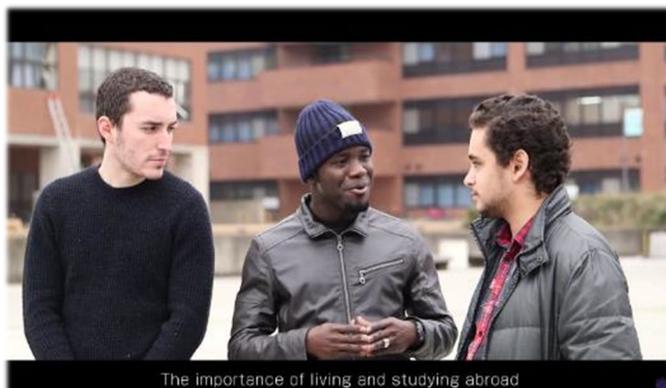
また、CiC協定校との間では双方向の職員交流を活性化すべく、平成29年2月にサンパウロ大学から職員を受け入れて研修を実施したほか、同年5月にはErasmus+の協定を活用してボルドー大学からの職員を受入予定である。

教育改革関連

1. 科目ジュークボックスを活用した学生交流の促進

平成28年9月に開催したCiC実務者会合において、科目ジュークボックスを活用した学生交流の手続きについてCiC協定校間で合意した。また、同年10月にボルドー大学の93科目、翌年2月に国立台湾大学の169科目を登録し、筑波大学の142科目と合わせて合計400科目を越えた。さらに、3月より、これらの科目履修を目的とした留学を希望する学生の募集を3大学で開始した。

加えて、CiC協定校への留学促進を図るべく、CiC協定校と共同でプロモーションビデオを制作・公開するとともに、CiCに特化したガイドブック、リーフレット、ポスター等を制作・配布した。



The importance of living and studying abroad

CiCプロモーション・ビデオ

- The whole world is your campus -

<https://www.youtube.com/watch?v=buNlq0lyu84>

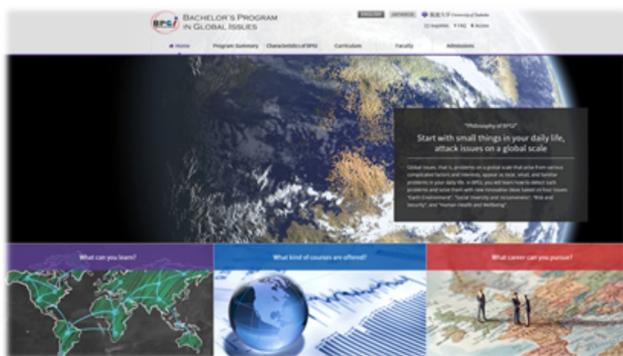
教育改革関連(続き)

2. 新たな学位プログラムの開始

(1) 地球規模課題学位プログラム(学士)の開設

分野を超えて地球規模課題に取り組むことのできるグローバル人材を養成するため、**全学横断・文理融合型の地球規模課題学位プログラム(学士)**を新たに開設し、平成29年3月より学生募集を開始した。(H29.10~学生受入予定)

本プログラムでは、**Project/Problem-based Learning (PBL) 型の学修**を中心とし、**全て英語により実施**するとともに、本学のCampus-with-Campus協定校である**国際基督教大学**で半年間の**リベラルアーツ教育**を行う予定である。

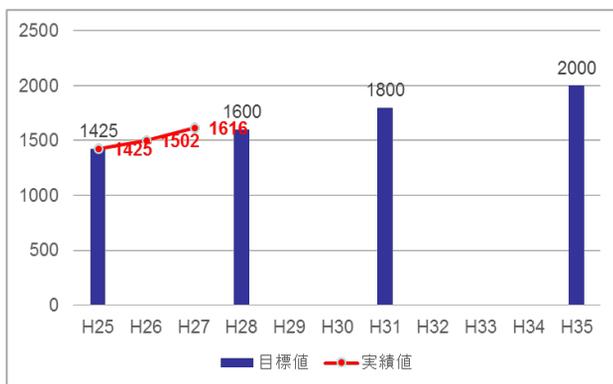


地球規模課題学位プログラム(学士)ウェブサイト
<http://bpgi.tsukuba.ac.jp/jp/>

(2) Japan-Expert(学士)プログラム第1期生の入学

日本の文化・社会を理解し、日本マインドを持った留学生の育成を目的とした**Japan-Expert(学士)プログラム**について、平成28年10月に**第1期生となる6名**が入学した。(国籍:中国3、カンボジア1、ミャンマー1、ドイツ1)

本プログラムでは、出願要件としての日本語能力の基準を緩和する一方で、入学後半年間の集中日本語授業を行うことにより、日本語能力を向上させ、その後はそれぞれの専門分野を日本語で学ぶことができるカリキュラムとなっている。



外国人研究者受入数(通年)

■ 大学独自の成果指標と達成目標

□ 外国人研究者の受入数

外国人研究者の受入数については、Tsukuba Global Science Weekの開催・規模拡大等の成果もあり、**毎年100人程度の規模で増加**。目標を大きく超えて推移している。

■ 国際的評価の向上につながる取組

1. Times Higher Education社「最も国際的な大学ランキング」世界141位(国内2位)

本事業による国際性の増大の成果もあり、平成29年2月にTimes Higher Education社が公表した「最も国際的な大学ランキング」において、**世界141位にランクイン**した。

国内では東京大学に次いで2位となったが、**評判調査に係る指標を除く客観的な指標(外国人教員、外国人留学生、国際共著論文に係るもの)**では国内トップのスコア(37.1 pt)を獲得した。

2. 海外教育研究ユニット招致報告会の開催

平成29年3月、これまでに招致した**全6ユニット**が一堂に会し、**本学での教育研究活動に係る取組状況と成果を発表**する「海外教育研究ユニット招致報告会」を開催した(英語で実施。学内外から約70名が参加)。本報告会によって各ユニット間でグッドプラクティスを共有することができた。加えて、全学からの参加者を得たことで、今後のユニット招致の一層の推進が期待できる。



海外教育研究ユニット招致報告会ポスター

【海外の大学との連携の実績】

□ Campus-in-Campus協定校との連携強化

平成28年度より、新たにCiC協定校であるカリフォルニア大学アーバイン校から**海外教育研究ユニットを招致(体育科学分野)**し、従前からの教育重点型、研究重点型とは異なるCiC型として位置付けた。これにより、今後他のCiC協定校からのユニット招致も促進することで、**より包括的なCiC協定校との交流が加速**することが期待される。

■ 自由記述欄

□ 筑波大学海外留学支援事業(はばたけ!筑大生)による海外派遣者数の飛躍的な増加(初の年間2,000人超え)

平成27年度に引き続き、学長裁量経費を財源に「はばたけ!筑大生」奨学金制度を運用し、「海外武者修行」を含む多様な留学を推進(H28予算額:約1億円、H28採択実績842人)した結果、**全体の海外派遣者数が2,145人**となり、**初めて2,000人(年間)を上回った**。

また、「海外武者修行支援プログラム」に参加した学生グループについて**帰国報告会を3月に開催**し、学長をはじめとする教職員や在学生の前でプログラム参加学生がプレゼンテーションを行った。本報告会では、**プログラム参加学生の留学成果の確認**とともに、**他の学生の留学への興味関心を高める**ことを目的としており、今後の加速度的な海外派遣者数の増加が期待できる。



「海外武者修行支援プログラム」帰国報告会の様子

5. 取組内容の進捗状況(平成29年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. Campus-in-Campus (CiC) 協定校を7校に拡大

新たに、ユトレヒト大学、グルノーブル大学とCiC協定を締結した。これにより、CiC協定校は計7校へと拡大し、CiCの枠組みを通じた学生交流、教職員・研究者交流の一層の進展が期待される。

2. CiC運営委員会 / 実務者会合を開催

つくばグローバルサイエンスウィーク(TGSW)期間中の9月26日に、CiC協定校の関係者と本学関係者による**運営委員会及び実務者会合**を開催し、本構想の取組状況を踏まえ、更なるモビリティの向上に向けて意見交換を行った。

3. SGU中間評価でS評価を獲得

平成29年度に実施された第1回中間評価において、「Campus-in-Campus」や「海外教育研究ユニット招致」をはじめとする本学の取組が高く評価され、**5段階評価で最高の「S評価」**を獲得した。



Campus-inCampus協定校マップ(2018年3月現在:7校)

ガバナンス改革関連

1. 大学経営改革室の設置

大学戦略室を発展的に改組再編し、平成30年4月に**大学経営改革室**を設置すべく、規定整備及び予備検討を行った。同室は、教職協働の学内委員に財界などの外部有識者を加えた学長直属の諮問組織として設置され、将来の経営基盤を強化するために必要な具体的戦略の検討と提言を行う。同室の設置を通じて、大学経営改革を中長期・短期の両面において戦略的に、一貫性のある取組として推し進めていくための体制強化が図られる。

2. 戦略的分野拡充ポイントの構築・活用

学長のリーダーシップの下、優秀な人材を確保し、限られた人的資源の戦略的な配置をより一層推進するためのドライビングフォースとして「**戦略的分野拡充ポイント**」の枠組みを構築した。①「つくばトップ・ランナー(優秀な若手教員の早期昇任人事)」、②「機能強化経費の効率の活用」、③「新分野開拓・後任不補充の解消」を「3本の矢」に、持続的な組織強化と教育研究機能の向上を目指す配分計画を策定し、平成29年度より運用を開始している。

3. 全学SD研修会ネットワーキング・ワークショップの開催

グローバル・スタッフ育成室による英語研修・各種SDセミナーの一環で、日頃から連携関係にある東南アジアの大学(7カ国・20大学)から23名の教職員を招き、本学教職員との情報共有・意見交換の場として、**全学SD研修会ネットワーキング・ワークショップ「大学のグローバル化を考える」**を開催した。使用言語は全て英語であり、グローバル化する大学の課題解決をテーマに活発な意見が交わされ、本学のみならず東南アジアの事務職員の高度化・グローバル化に資する有意義な議論が行われた。



筑波大学SD研修会ネットワーキング・ワークショップ「大学のグローバル化を考える」(H30.2.13)

教育改革関連

1. 地球規模課題学位プログラム(学士)第一期生を受入

分野を超えて地球規模課題に取り組むことのできるグローバル人材の養成を目的に新設した、全学横断・文理融合型の**地球規模課題学位プログラム(学士英語プログラム)**に10月より**第一期生6名が入学**した。(国籍:台湾2名、韓国・中国・インドネシア・ネパールより各1名)第一期生6名は、本学のCampus-with-Campus協定校である国際基督教大学(ICU)とのパートナーシップに基づき、平成30年4月よりICUで半年間のリベラルアーツ教育を履修予定である。

2. ボルドー大学、国立台湾大学との3大学ジョイントディグリープログラムが始動

我が国初の**3大学国際ジョイントディグリープログラム**として、国際連携食料健康科学専攻(修士課程)(GIP-TRIAD: International Joint Degree Master's Program in Agro-Biomedical Science in Food and Health)を人間総合科学研究科に開設した。本専攻では、本学と、CiC協定校であるボルドー大学、国立台湾大学の学生がともに3大学をめぐって、地球規模の課題である「食と健康」について学修する。9月より本学で第1セメスター(9月~2月)が始まり、国立台湾大学及びボルドー大学から学生を受け入れた。



GIP-TRIAD学生によるトーヨーエネルギーファームソーラーシェアリング・営農型発電施設の見学ツアー

教育改革関連(続き)

3. マレーシア日本国際工科院(MJIIT)とのジョイントディグリープログラムを開設

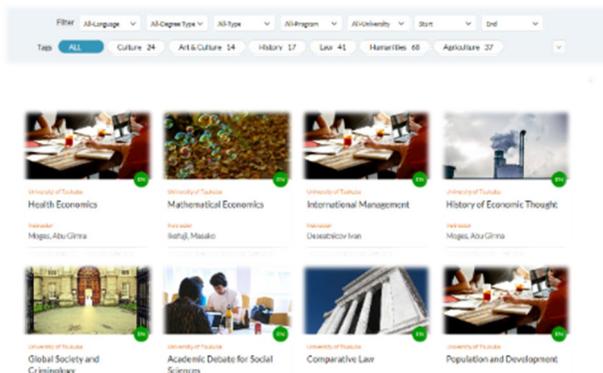
マレーシアにおいて工学系人材を多く輩出する研究重点大学のひとつであるMJIIT(マレーシア工科大学の下に設立)と連携し、国際連携持続環境科学専攻(博士前期課程)を生命環境科学研究科に開設した。これは環境科学基礎、環境技術、社会実装の3つを柱とした国際ジョイントディグリープログラムで、修了生は理学、農学、工学、社会科学等の専門的かつ俯瞰的な洞察力を持って地球規模の環境問題に取り組み、持続可能な社会の実現に寄与することのできる人材として活躍が期待される。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

□ 科目ジュークボックスシステムの充実とユーザビリティの向上

科目ジュークボックスシステムに筑波大学から約900科目を新たに追加するとともに、国立台湾大学から約380目、ボルドー大学から約370科目)、サンパウロ大学からの提供科目(約100科目)、マレーシア工科大学からの提供科目(約90科目)を新たに登録・公開し、計約2,000科目へと科目数を大幅に拡充した。また、科目の検索機能やリスト表示機能、各CiCパートナー大学による編集機能等を追加し、システム全体のユーザビリティの向上を図った。

これにより、各CiCパートナー大学の学生に対する留学への動機づけが促進されるとともに、広く社会における本事業ならびにCiCの取組に対する認知度が向上することが期待される。



科目ジュークボックスシステムにおける検索機能の追加
<https://cj.tsukuba.ac.jp/courses/>

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. つくばグローバルサイエンスウィーク2017(TGSW2017)を開催

9月25日から27日の3日間、つくば国際会議場において、Tsukuba Global Science Week2017(TGSW2017)を開催した。8回目となる今回は、世界48か国、158機関から320名近い発表者と、実数で1,800名を超す来場者を迎え、海外の協定校やつくば研究学園都市に所在する研究機関との共同主催を含む47のセッションが行われた。

2. TSUKUBA index 1.0の公表

筑波大学が独自に開発したiMD(index for Measuring Diversity)の算出結果一覧として、TSUKUBA indexをウェブ公開した。今回公開されたのは、筑波大学人文社会系の教員が2015年ならびに2016年に投稿した主な学術誌、およびWeb of Scienceから選んだ200誌(データ提供:クラリベイト・アナリティクス)のiMDであり、学術誌の多様性を測る一助となる。世界大学ランキング等に用いられているデータベースに収録されていない学術誌は、従来評価の対象となっていなかったが、iMDによって言語・国を問わず、すべての学術誌を定量的に評価することが可能となる。

3. 世界大学ランキング

2018年版のQS世界大学ランキングの分野別の評価において、スポーツ関連分野で25位、図書館情報マネジメント分野で37位にランクインした。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

平成29年度より、CiCパートナー大学であるユトレヒト大学から、新たに物理学分野の教育研究ユニット「Quark Gluon Plasma Research Unit」を招致した。これにより、平成29年度までに招致された教育研究ユニットは、構想調書に掲げた目標を上回る累計8ユニットとなった。また、平成30年3月には、CiCパートナー大学以外から招致された教育研究ユニット(米国エモリー大学との共同研究事業による「Social Neural Networks Research Unit」)も含め平成29年度に招致された2ユニットがキックオフシンポジウムを開催した。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

1. Campus-with-Campus協定の締結により更なるトランスボーダー化を推進

本構想の中核をなす「Campus-in-Campus」の考え方を、教養教育や専門分野において相補的な連携を行う国内大学等に当てはめた発展的な取組として「Campus-with-Campus(CwC)」協定を、リベラルアーツ教育に強みのある国際基督教大学及びダイバーシティ推進を牽引するお茶の水女子大学と締結した。国内の大学ともキャンパス機能を共有化することで、教育研究資源のトランスボーダー化を推進できる体制を整備した。

2. グローバル高専指定校との連絡協議会を開催

本学と、国立高等専門学校機構(以下「高専機構」)から指定されている全国のグローバル高専(GCT)指定校9校による第1回連絡協議会を、高専機構関係者も交えて11月9日に開催した。

本協議会は、グローバル高専と本学が連携して、教育研究・人材育成・グローバル化等を進めることを協議するために設置されたもので、今後、相補・発展的な連携方策の企画・立案を通じ、高専のグローバル化の推進にも寄与するとともに、スーパーグローバル・ハイスクール(SGH)とGCTとSGUの互恵的連携が期待される。



グローバル高専指定校と本学との連絡協議会(H29.11.9)

6. 取組内容の進捗状況(平成30年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. Campus-in-Campus (CiC) 協定校を9校に拡大

オハイオ州立大学(アメリカ)及びボーフム大学(ドイツ)との交渉を重ね、両校と新たにCiC協定を締結した。これによりCiC協定校は計9校となった。さらなる拡大に向け、複数の候補大学と協議を進めており、目標値を上回るペースでCiCの整備が進んでいる。

2. CiC協定校との組織的教職員交流促進プログラムを実施

12月から3月にかけてCiC協定校のボルドー大学、グルノーブル大学連合、オハイオ州立大学との間で組織的な教職員交流プログラムを実施した。プログラム参加者は、①新たな分野での共同研究、学生交流、教育プログラムの開拓、②部局レベルの持続的な交流基盤の確保や人的ネットワークの拡充・発展、③今後の持続的な学生モビリティの向上、共同研究の発展、双方向の研究者交流の促進、の3つの観点から各協定校と組織対組織の交渉を行った。

結果として、新たな共同研究の構築、新規の短期サマープログラムの開発、ダブルディグリープログラムの新設などといった具体的な進展を得ることに結びついた。2019年度以降も継続実施を検討しており、学生・教職員のモビリティの飛躍的向上を目指す。



〈 CiC協定校のオハイオ州立大学担当者との懇談 〉

ガバナンス改革関連

1. 筑波大学スーパーグローバル大学事業第2回外部評価委員会の開催

平成31年2月に第2回の外部評価委員会を開催し、5名の外部有識者との対話を実施した。まず、学長・副学長から前回に指摘された課題点に係る取り組みを中心にSGU事業の進捗状況を報告した。これに対し、委員からは、トップダウンによる強力なリーダーシップのもと改革が大幅に進展していることについて高い評価を得た一方、長期的視点から日本の大学としてどのような資産を残していくのかといった今後の展望に関する指摘もあり、事業のインパクトも含めて活発な議論が行われた。

2. 定量的評価指標に基づく組織評価を学内の全組織で実施

平成28年度より定量的評価指標による組織評価を開始し、段階的に拡大してきた。平成30年度には学類、専攻を含む100以上の全学組織を対象に評価を行い、評価結果に基づき重点及び戦略的経費を傾斜配分する等インセンティブの付与も実施している。さらに、教育研究の方向性を同じくする学外組織との比較(ベンチマーキング)もスタートした。

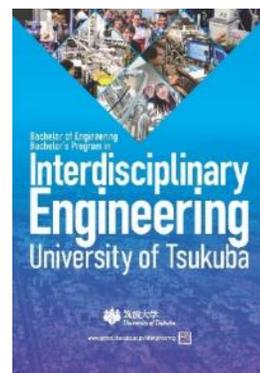
3. 年俸制教員の堅調な増加

年度末年齢64歳以上の教員の年俸制への移行及び助教の年俸制による採用等を推し進め、年俸制適用教員数は平成25年度の198人から平成30年度には570人へと大きく増加した。

教育改革関連

1. 総合理工学位プログラムの開設

分野横断的な理工学教育を行う英語プログラムである総合理工学位プログラムの開設に向け、2018年初頭から準備を進め、2019年9月から設置されることとなった。併せて優秀な外国人留学生の獲得のための広報活動に力を入れ、パンフレット作成、ウェブ広報、説明会参加、現地校訪問などに注力した。2018年秋には第一期生のウェブ出願を開始し、米国を中心に31名の受験があり、そのうち特に優秀であった5名を最終合格者とした。



〈 総合理工学位プログラムのパンフレット 〉

2. ユトレヒト大学、ヨハネスブルク大学との3大学共同教育プログラム「Global Master's Program」を創設

スポーツが本来有している社会変容へのプラス作用を効果的にマネジメントできるスポーツ国際開発人材を養成することを目指し、3大学による共同教育プログラムを設立した。プログラム第1期生の10名は2018年2月にユトレヒト大学、7月に本学、2019年2月にヨハネスブルク大学でそれぞれ1ヶ月間の学修を経て一連のプログラムを修了した。修了生はそれぞれの大学において修士課程を修了し、将来的にスポーツ国際開発の場での活躍が期待される。

3. マレーシア工科大学(UTM)と学生交流プロジェクトを立ち上げ

平成31年2月、UTMにおいて本学生20名とUTMの学生21名による学生交流プロジェクトを新規に実施した。「持続可能な開発のための2030アジェンダ」にて記載された2016年から2030年までの持続可能な開発目標(SDGs)から、あらかじめ両大学の学生で構成された少人数グループで選択したテーマについてディスカッション及びそのテーマを達成するための課題等をまとめ成果を発表した。

4. Campus-with-Campus (CwC) 協定により国際基督教大学(ICU)との学生交流を実施

2018年度に開設した地球規模課題学位プログラムの第1期生を本学とCwC協定を結ぶICUへ半年間派遣し、リベラルアーツ科目を受講させた。また、ICUから3名が本学で卒業研究指導を受け、2名が科目履修を行った。CwC協定による国内大学との学生交流が各大学の強みを活かしたキャンパス共有型の連携のモデルとして実施されていくことが今後も期待される。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. 科目ジュークボックス掲載科目を一層充実

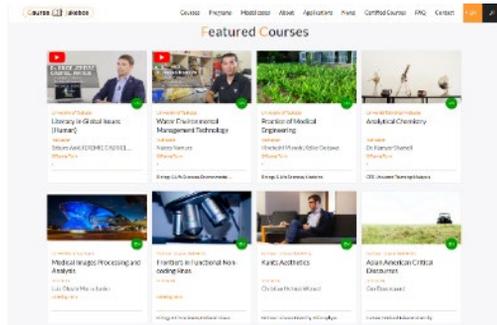
本学独自の科目登録システムである科目ジュークボックスの登録科目数が大幅に増加し、**2400科目が目前**となっている。科目紹介動画を新たに作成し、同システムによる発信力を高めた。広く社会に本学のCiC事業を認知・浸透させる取り組みとしてさらに活用していく。

2. 外国語のみで卒業できるコース数の顕著な増加

外国語のみで卒業できるコース数は平成29年度は49コースであったのに対し、**平成30年度は63コース**となり、14コースが新たに創設された。これにより外国語を母語とする留学生の受入体制がさらに強化され、国際化のいっそうの促進が期待される。

3. CiC協定校からの職員研修受入による内側からのグローバルスタッフ育成の促進

本学は学生間、教員間の交流にとどまらず職員交流も積極的に推進しており、**職員研修の一環としてCiC協定校から職員を1週間受け入れた**。全体で**10名の事務研修生が訪れ**、事務研修生には自身の大学紹介をしてもらい、本学事務系職員も多数参加した。このことは大学のグローバル化を担う職員相互の実務者レベルの知識交流として非常に有意義であり、グローバルスタッフ育成に寄与している。



〈科目ジュークボックスの登録科目一覧〉

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. CiCワークショップ2018を国立台湾大学で開催

11月にCiCワークショップ2018を国立台湾大学で開催した。CiCパートナー大学と共同で実施している3つの海外教育研究ユニット(カリフォルニア大学アーバイン校、グルノーブル大学連合、ユトレヒト大学)の取り組みと成果を国立台湾大学をはじめとするCiCパートナー大学からの参加者と共有し、さらなる研究交流や国際産学連携の可能性について討議した。



〈国立台湾大学でのCiCワークショップ2018の様子〉

2. つくばグローバルサイエンスウィーク2018(TGSW2018)を開催

9回目の開催となるTGSW2018(9月20日～22日)では、世界33カ国、162機関から273名の発表者と実数で1600名超の来場者を迎え、「Driving Sustainable Development」をメインテーマにさまざまな立場から議論が交わされた。閉会式では「**TSUKUBA宣言2018**」を公表し、TGSWに結集した研究者コミュニティがトランスボーダーな連携のもとに持続可能な開発を推進する決意を表明した。

3. 「THE・QS世界大学ランキングにおける有効指標を踏まえた大学力強化にかかるタスクフォース」を学内に設置

THE・QS世界大学ランキングにおける有効指標を踏まえた大学力強化にかかるタスクフォースを設置し、①世界大学ランキングに係る情報の整理・共有、②世界大学ランキング(THE・QS)指標別順位・スコアに係る情報の整理・分析、③レピュテーションのスコア改善のための方策の検討等を行った。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

海外教育研究ユニット招致事業で受け入れたユニット数は累計で9に達した。また、平成30年度に招致期間の終了を迎えた2ユニットについて、優れた成果の波及効果を高めるために32年度末まで期間を延長した。

ユトレヒト大学からの招致ユニットQuark Gluson Plasma Research Unitは、上記のCiCワークショップ2018に加え、「International Workshop on Forward Physics and Forward Calorimeter Upgrade in ALICE」と題するワークショップを独自に開催し、ユトレヒト大学との共同研究の進捗状況や実績、将来展望について学内外の研究者と広く共有した。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

1. 筑波大学広報戦略の策定

本学の広報の強化を目的として平成30年4月1日より上記の戦略が施行された。学内外・海外への迅速かつ正確な情報発信及びブランド力の向上等を通して**本学のプレゼンスの強化を図る**。

2. 筑波大学在学中のグローバル高専出身学生との座談会を開催

グローバル高専出身学生のうち、3年次編入制度により入学した学生を対象として、**本学教育担当副学長との意見交換会を開催**した。これを一助としてグローバル高専への本学の情報提供を効果的に進め、多くの優秀な学生を編入生として獲得し、グローバル人材育成の貢献につなげたい。

3. 筑波大学紹介One Minutes Video コンテストを開催

本学の様々な魅力を学生の目線から海外の生徒・学生に伝えることを目的として**英語による1分間のビデオコンテストを開催**した。応募作品は動画配信サイトYouTube上で公開し、本学の多様な姿を広く発信した。



〈One Minutes Video コンテストの入賞者〉

7. 取組内容の進捗状況(令和元年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. 新たにアルファラビ・カザフ国立大学と10校目となるCampus-in-Campus (CiC) 協定校締結

9月にアルファラビ・カザフ国立大学キャンパスにおいて、同校とCiC協定の調印式を行い、10番目のCiCパートナーが誕生した。CIS地域としては初めてのCiC協定校であり、CiCの特色であるキャンパス資源の共有化により同地域の地の利を活かした共同研究や異文化交流のさらなる発展が期待される。

2. International Alumni Networking Eventを開催

11月、筑波大学の学園祭開催期間中にInternational Alumni Networking Eventを実施した。本学の外国人留学生OB/OGからキャリアパスについて直接アドバイスを受けられる相談会や、留学生の日本での就職に関する情報提供などが行われた。

3. 全学FD・SD研修会「留学先としての日本の大学、その魅力をどう高めるか？」を開催

7月に米国および日本の高等教育事情に精通している米国在住の日本人ジャーナリストを講師に招き、米国の大学入試の現状や米国学生の留学事情に関する本学教職員向けの研修会を開催した。日本の大学が米国の学生にとって魅力的な留学先となるためのヒント得るとともに、本学の国際化の一層の推進に向け、参加した教職員の意識を向上させる機会となった。



アルファラビ・カザフ国立大学とのCiC協定締結

ガバナンス改革関連

1. 第3回外部評価委員会の開催

令和2年2月に、第3回目となる外部評価委員会を開催した。外部評価委員からは、当該事業のアウトプットやロジックモデルに関する質問があり、アウトカムの成果の可視化などをめぐって建設的な議論が交わされた。総評として、永田学長の強いリーダーシップや先駆的な取組が高く評価され、引き続き当該事業を発展させ、その成果を社会に還元していくための有益な助言を受けた。

2. 混合給与制度による採用数が着実に増加

平成25年度から運営費交付金と外部資金等を組み合わせた給与支給制度「ハイブリッドサラリーシステム」及び他機関との業務・従事期間の割合に応じた給与支給制度「ジョイント・アポイントメントシステム」(H27年度より「クロスアポイントメントシステム」として再整備)を設けて活用を促進している。H29年度末時点から令和元年5月1日現在にかけてハイブリッドサラリーシステムは7件から23件、クロスアポイントメントシステムは19件から36件へと増加している。このうち6名が外国人教員等である。

3. オープンイノベーション(OI)国際戦略機構を設置

文部科学省の「令和元年度オープンイノベーション機構の整備事業」に採択されたことを受け、OI国際戦略機構を新たに設置した。今後の取り組みによって、本学の海外拠点を有効に活用しつつ、海外でのライセンス取得や資金調達を活発にしたり、海外企業との組織対組織の連携を強化するなど、オープンイノベーションの国際展開が期待される。

教育改革関連

1. 総合理工学位プログラム(学士)第一期生を受入

9月、ミクロからマクロまでカバーする理工学の横断型の学際プログラムである総合理工学位プログラム(学士)の第一期生3名を迎えた。同プログラムは、学生が3年次から2つの研究室に所属してPBL教育を受けられる点が特徴的である。早くから実践的な環境で研究することができ、また複数の研究室への所属により、各学生が自身の専門性や学びたい分野を見極めることができる。第一期生も登場する広報ビデオも完成し、次年度以降も海外での広報活動に一層力を注いでいく。

2. ヒューマニクス学位プログラムを開設

博士課程教育リーディングプログラムや世界トップレベル研究拠点プログラム(WPI)等の成果をもとに卓越大学院プログラム「ヒューマニクス学位プログラム」を開設し、平成31年4月に第1期生10名を受け入れた。「ヒューマニクス」は、本学の強みである生命医科学と理・工・情報学が連携した新たな学問領域である。連携する個々の分野の常識を大きく超えた、質的に異なる新たなパラダイムの創造(ZERO to ONE)に挑戦する博士卓越人材を養成していく。



ヒューマニクス学位プログラムのウェブサイト

■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. 科目ジュークボックス掲載科目の認定区分を公表

科目ジュークボックス(CJ)はCiC協定校間で授業科目を共有するためのウェブシステムである。一部の学類において、CiC協定校が開設し、CJに掲載している科目を本学の卒業単位に算入するための認定区分を公表した。これにより、本学学生が履修計画をこれまで以上に立てやすくなり、科目ジュークボックスの更なる活用が期待できる。

2. 本学独自の留学説明会を実施(ベトナム、インドネシア)

本学は世界各地で行われる日本の大学フェア等に積極的に参加している。平成31年度の重点施策として、9月15日から21日にかけてベトナム国家大学ハノイ校及び附属高校、インドネシア大学、ビヌス大学等において留学説明会を実施した。現地に滞在していた本学在学学生や卒業生の協力もあり、大学生・高校生及び関係教員ら約1,000人の参加者を得ることができた。



ビヌス大学(インドネシア)での説明会

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. 第1回筑波会議を開催

本学は更なる国際共同研究の促進とレピュテーションの向上を目指して、2010年から毎年 Tsukuba Global Science Weekを主催してきた。これを拡張し、将来的に「若手版のダボス会議」となることを目指す「筑波会議」を10月に筑波研究学園都市で開催した。「Society5.0とSDGsを見据えた目指すべき社会の在り方とその実現に向けて取り組むべき課題」をテーマとして、産官学連携という本学の強みを国内外にアピールする好機となった。最終日には、第36回World Cultural Council (WCC) 授賞式(日本初)が併せて開催され、アルバート・アインシュタイン科学賞、レオナルド・ダ・ヴィンチ芸術賞、日本の若手研究者への特別賞が授与された。

2. ボストンに産学連携のための拠点を設置し、「筑波大学ナイト」を開催

シリコンバレーとボストンにスタートアップ支援を目的とした海外オフィスを設置した。9月にボストンの拠点を置くケンブリッジイノベーションセンターで、日本の大学としては初めて「筑波大学ナイト:The Role of Academia in Innovation」を開催した。筑波大学発ベンチャーのCEOを務める4名の教員によるフラッシュトークやネットワーキングを通して、大学発ベンチャーが活発という本学の強みを国際的にアピールすることができた。



筑波ナイトのプログラム

3. THE社の「最も国際的な大学ランキング」において世界133位にランクイン

令和2年1月にTimes Higher Education社が公表した「最も国際的な大学ランキング」において世界133位(国内2位)にランクインした。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

1. CiC協定校の教職員によるSDセミナーを開催

CiC協定校の教職員を講師として招き、4月17日に「国立台湾大学:その国際化と次へのステップ」、12月18日に「アル・ファラビカザフ国立大学の国際戦略」と題するセミナーを開催した。

2. オハイオ州立大学(OSU)と本学障害科学類との共同企画による学生交流プログラム

9月に本学障害科学類とオハイオ州立大学人間生態学部との共同企画により短期海外研修プログラムを実施した。令和元年度は日本人学生14名を派遣した。参加学生からは、OSUの授業内やアメリカの街中を実際に歩く中で、障害のある児童・生徒の教育やアクセシビリティにおける日米の違いへの気づきを得たとの感想が多く聞かれた。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

1. 永田学長がつくば市・ポーfum市連携合意書調印式に出席

11月、つくば市とポーfum市の連携合意書調印式があり、永田学長をはじめとする本学関係教員が出席した。昨年度本学とCiC協定を締結したポーfum大学とは、全学レベルの学生・研究者交流を盛んに行っており、また本学発のベンチャーであるサイバーダインの欧州拠点がポーfum市に設置されている。こうした大学を起点とする都市間の交流が両市を結びつける契機となった。

2. 第2回グローバル化をリードする高専と筑波大学との連絡協議会を開催

旧グローバル高専指定校9校と本学は、第2回となるグローバル化をリードする高専と筑波大学との連絡協議会を開催した。同連絡協議会において承認を得た「高専卒業生による高専訪問大学説明会」については、令和元年度中に旧グローバル高専校3校に職員及び本学高専卒業生を派遣し、本学説明会の実施につなげた。

旧グローバル高専においてグローバルな経験を積んだ高専生を、本学が引き続き教育することで、国際的な舞台上で活躍できる人材の輩出を目指す。



第2回グローバル化をリードする高専と筑波大学との連絡協議会

3. 茗溪学園中学・高等学校とグローバル化推進協定を締結

7月25日に、本学と茗溪学園中学校高等学校が「グローバル推進に関する協定」を締結した。同じ筑波研究学園都市に位置する教育機関としてこれまで様々な国際交流事業を連携して行ってきたが、今後はグローバル人材の育成をキーワードとしてより進んだ高大連携体制を敷いていくことが可能となる。

8. 取組内容の進捗状況(令和2年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. アルファラビ・カザフ国立大学 筑波大学オフィスを開所

12月、アルファラビ・カザフ国立大学(KazNU)の筑波大学オフィス(AL-Farabi Center)の開所式が執り行われた。同学とは令和元年度にCampu-in-Campus協定を締結し、KazNU内に本学のオフィスを設置している。今回、本学にKazNUのオフィスが設置されたことにより、キャンパス資源の共有化が一層進み、同学との学生・教職員交流の拡大や滞在中のサポート体制の強化が期待される。

2. Campu-in-Campus(CiC)会議をオンラインで挙行

6月、CiCパートナー校との実務者会議をオンラインで開催し、コロナ禍における各校での状況や今後のCiC事業の取り組みなどについて意見交換を行った。また、10月に実施したExecutive Level Meetingでは、オンライン及びオンサイトでされるハイブリッド教育、リサーチアドミニストレーターネットワークの開発、産学連携に関する議論を行い、その詳細について、11月～12月にかけて教育・研究・産学連携の各テーマについての部会を開催した。参加校からCOIL型プログラムの開発や新たなオンライン交流プログラムの可能性について前向きな姿勢が示されるなど、有意義な会合となった。



CiC Executive level 会議の様子

3. 秋季留学フェア IMAGINE THE FUTURE留学！を開催

10月、筑波大学秋季留学フェアを開催し、延べ1000人以上の学生の参加があった。コロナ禍で実渡航による海外留学が制限される中、留学の現状や語学試験対策、各種のオンライン語学プログラムなどポストコロナを見据え、学生の留学促進やモチベーションアップにつながる情報提供を行った。

4. オンライン交流イベントを実施

学生の語学力向上や国際交流を促進することを目的とし、学生の要望を踏まえたオンライン学生交流イベント(Tsuku-Chat、GOTCHAT、G-Chat、J-Chatなど)を11月から3月にかけて開催した。Tsuku-Chatは筑波大生と海外協定校の学生を対象とした英語でグループディスカッションを行うイベントであり、毎回100名以上が参加した。G-Chatでは1対1での英会話の機会を提供した。GOTCHATは、学生同士による言語交換の機会を提供するためのマッチングチャットイベントであり、約100組のペアが成立した。J-Chatは、学内の日本人学生と留学生をつなぐ日本語チャットイベントとして開催し、学内の国際交流の促進を図った。

ガバナンス改革関連

1. 海外渡航システム(TRIP)の運用開始

令和2年度より、本学構成員の海外渡航情報をウェブ上で収集・管理する海外渡航システムの運用を開始した。これにより、本学教職員・研究者・学生の海外渡航情報を一元的に管理し、リアルタイムで共有できるようになり、有事の際の迅速な安否確認や関係部局間での情報共有が可能となるなど本学の危機管理体制が向上した。

2. 教学マネジメント室と教学デザイン室を新たに設置

令和2年度より、学位プログラムの教育の質を保証・向上させていくための全学的なマネジメントを担う教学マネジメント室と、学群及び大学院の教育改革の方針及び計画の立案を行う教学デザイン室を設置した。教学マネジメント室では、ルーブリックによる自己評価基準を用いた学位プログラムのモニタリング及びプログラムレビューを開始した。教学マネジメント室と教学デザイン室が両輪となって、教育改革の推進と教育の内部質保証の強化に取り組んでいく。

教育改革関連

1. 大学院の学位プログラム制への移行を完了

令和2年度、大学院を8研究科から3学術院に改組再編し、学位プログラム制へ全面移行した。これにより、従来の専攻の壁が取り払われ、幅広い分野の教員が協働して学位プログラムを担当することが可能となり、従来より学位プログラム制の考え方で設置している学群と併せて、全学的に学生主体の考え方に基づく教育課程が実現された。

2. オハイオ州立大学とのCOIL型の授業を開設

オハイオ州立大学と本学システム情報工学研究群はAmerican Council on Educationの支援を受け、Collaborative Online International Learning(COIL)の形式による共同授業「災害から学ぶ:巨大災害が社会基盤施設、工学や社会システム全般に及ぼす影響」を開設した。

3. 筑波大学グローバル+リーダーシップ教育プログラム(TG+)を開設

「地域研究イノベーション学位プログラム(ASIP)」の取り組みを全学規模で展開し、人文社会系以外の学内他分野へも門戸を開くため、4月より新たに「筑波大学グローバル+(プラス)リーダーシップ教育プログラム(TG+)」を開始した。このプログラムでは地球規模の課題を新興国現地の視点から学ぶことを目的とし、5月から5名がプログラム生として参加している。



さあ、
新興国への
ドアを開けよう！



筑波大学グローバル+リーダーシップ教育プログラム

あなたが関心を持つ新興国はどこですか。
[Global+]とは「グローバル+ローカル」を意味しています。
[ローカル]には「プログラム生それぞれが所属する所属国」が指します。



筑波大学グローバル+(プラス)リーダーシップ教育プログラム(TG+)

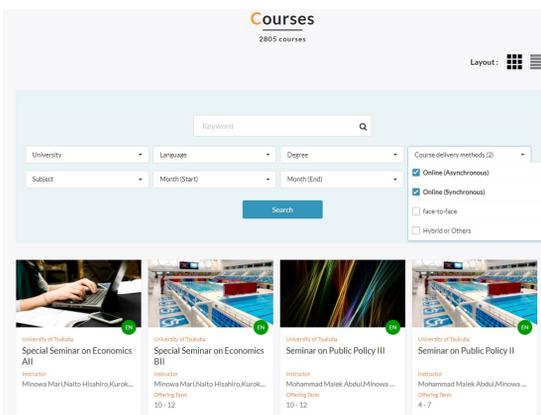
■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. 科目ジュークボックスシステムでオンラインコンテンツの提供開始

科目ジュークボックスシステムを通じて本学のオンライン科目の提供を開始したことにより、コロナ禍で渡航が制限される状況下においても、CiCパートナー大学との単位互換を伴うオンラインでの学生交流を実施する体制を整備した。海外渡航の制限により本学での実渡航による留学を断念したCiC協定校の学生に対しても、本学の授業履修及び単位取得ができる環境を提供した。海外渡航が可能となり次第日本への留学を希望する学生も多く、その準備段階としての活用という点でも一定の成果を挙げている。令和2年度中には、本学の184科目が公開され、パートナー校の学生17人がオンラインで履修した。

2. チューニング100%達成

本学は国際的通用性・互換性ある教育システム構築を目指し、令和5年度までに全学位プログラムのチューニングを完了させることを独自目標として掲げてきた。本事業開始以来着実にチューニングを進め、令和2年度の学位プログラム制への移行に合わせ、コンピテンズ及びカリキュラムマップの確定並びに本学の教育宣言である筑波スタンダードの改訂を完了し、計画を前倒しでチューニング100%を達成した。



科目ジュークボックスのユーザーインターフェースを改善し、オンライン・オンサイトの授業形態でも検索が可能となった

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. 筑波大学とF1000 Research社、日本語にも対応した世界初のオープンリサーチ出版ゲートウェイを開発

本学とF1000 Research Limitedは、研究者が英語か日本語で論文が出版できる世界初のオープンリサーチ出版ゲートウェイを開発した。このゲートウェイにより、本学に所属する研究者は迅速かつオープンで透明性の高い方法であらゆる研究やデータを出版することが可能となる。物理学、生物学、医学、社会科学、芸術、人文学など、すべての分野を対象とし、従来の研究論文からプロトコル、登録済報告書、データノート、ケーススタディなど、あらゆる種類の研究成果をカバーしている。英語だけでなく日本語で論文等を出版することもでき、日本語で書かれた優れた研究成果がこれまで以上に世界に向けて発信され、可視化されることが期待される。



Researcher Matching Project for TGSW 2020

2. Researcher Matching Project for TGSW 2020を開催

Researcher Matching Projectにおいて、CiC協定校の研究者20名が参加した。同イベントでは、参加者が簡単な質問に答えて自身の研究を他の研究者等に知ってもらい、新たな共同研究の可能性を探る。今回は、CiC協定校の学生の研究室マッチングに貢献した事例も見受けられた。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

1. ユトレヒト大学との 海外研究ユニット招致事業において大きな成果

6月、本学とCiCパートナー大学であるユトレヒト大学との海外研究ユニットが提案する ALICE 実験 FoCal プロジェクトが、CERN 研究所(スイス)の新規プロジェクトを審議する国際委員会 LHCC において承認された。また、8月、科研費・基盤研究(S)「LHC 超前方光子測定によるグルーオン飽和とQGP生成起源」(2020-2024年度、代表 中條) が採択された。このように、CiCパートナー大学との研究ユニットが国際合同実験施設の新規プロジェクトに採択され、大型外部資金も獲得するなど大きな成果を挙げている。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

1. 本学の英語基幹サイトのリニューアルや英語プログラムのPR動画の公開により英語での情報発信を強化

12月、学内外に広く本学の情報を発信している基幹サイトのリニューアルを完了し、従前異なるデザインであった日本語サイトと英語サイトの統一を行った。これにより、両サイトを比較しながら情報を検索することができ、閲覧者の利便性が高まりました。またコロナ禍においてオンラインでの広報に活用すべく、学群及び大学院の英語プログラムのプロモーションビデオをそれぞれ作成した。特に学群のPR動画は公開後約5カ月で約5000回再生に到達した。



学群英語プログラムのプロモーションビデオ
(https://www.youtube.com/watch?v=RhaS0n_KJkk)

2. ボン大学の職員とのオンライン交流会を開催

2月、ボン大学の職員6名と本学職員6名がオンラインでvirtual exchange プログラムを実施した。参加者はペアワークやグループワークを通じて、異なる国における価値観や考え方の違いについて理解を深めることができた。オンラインによるパートナー大学との合同ワークショップは初めての試みであり、令和3年度以降も継続・拡大してオンライン教職員・学生交流を実施していく。

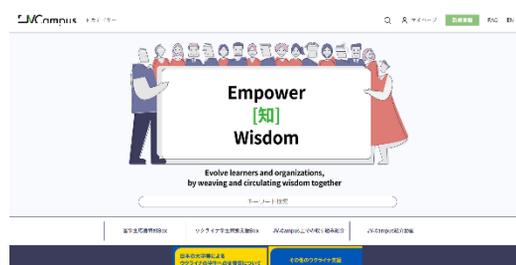
9. 取組内容の進捗状況(令和3年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

1. 大学の国際化促進フォーラム形成支援事業においてJV-Campusを開始

大学の国際化促進フォーラム形成支援事業の一環として、令和3年度に、オールジャパンで取り組むオンライン教育プラットフォームであるJapan Virtual Campus (JV-Campus)を開始した。これは、将来的に日本の高等教育の国際化を促進することを目的として、インバウンド・アウトバウンドの学生交流、地方社会をリードする人材育成、リカレント教育、大学の経営力強化などといった多方面への貢献が期待される。6月にプラットフォームの開発に着手し、3月初旬にパイロット事業を開始した。3月29日現在の参加機関登録数は留学生応援特別ボックスが68校・機関、個別機関ボックスが38校・機関に上っている。



(JV-Campusサイト)

<https://www.jv-campus.org/>

2. 秋季オンライン総合留学フェア「IMAGINE THE FUTURE. FAIR」を開催

10月、本学初のオンライン総合留学フェアである「IMAGINE THE FUTURE. FAIR」(IFF)をウェビナー形式で開催した。本フェアでは、筑波大学の概要、出願手続、奨学金、学類・大学院のプログラムなどを紹介し、教員によるミニレクチャーも行った。また、22の学内教育組織がオンラインブースを出展し、80人以上の教職員や学生が留学個別面談を行った。2日間で海外の学生、保護者、教員など1,197名が参加し、参加後のアンケートでは、総合満足度が5点満点中、大学院で4.39、学群で4.55という非常に高い評価を得た。なお、オンラインによる全学一丸となった学生リクルートイベントという先進性が評価され、IFFはTHE AWARDS ASIA 2022のStudent Recruitment Campaign of the Year部門のファイナリストに選出された。



(IMAGINE THE FUTURE. FAIRのウェブサイト)

3. オンライン学生交流イベントを国立台湾大学と実施

7月～9月にかけて、コロナ禍で対面での交流が制限される中、学生の国際交流を推進することを目的として、本学と国立台湾大学がオンライン学生交流イベントを実施した。両校からの参加者は34名(本学14名、国立台湾大学20名)で、グループに分かれてミーティングを6回以上行い、SDGsについてのディスカッションと、自由なテーマでの異文化交流を行った。9月11日のオンラインフォーラムにおいて各グループが議論の内容を発表し、参加者に修了証が授与された。また、参加者の有志が作成した各大学紹介のビデオも上映され、互いの大学についての関心をより高める良い機会となった。

ガバナンス改革関連

1. 学内国際関係部署の組織改編を実施

国内外の大学を取り巻く環境が目まぐるしく変わる中、国際的な連携や留学生のサポートに迅速かつ適切に対応できる組織体制が求められる。また、指定国立大学法人構想においては、2030年までに外国人学生5,000人を受け入れることを目標に掲げており、本学が目指す「国際性の日常化」の推進が期待される。こうした状況に対応すべく、令和3年度に以下のとおり学内組織の改編を行った。

- 新たに国際局を設置し、国際室とグローバル・コモンズ機構を国際局所属とした。これにより、法人の国際化に関する業務の効果的かつ戦略的な展開を進める体制を整備した。
- グローバル・コモンズ機構から、学生支援に係る部門(国際交流支援部門及びキャンパス・グローバル化部門)を移管し、新たにスチューデントサポートセンターを設置した。これにより、学生部と協働して全学的観点から国際交流に関するワンストップサービスを提供する。また、日本人学生及び外国人留学生等を区別することなく、既存の学生生活支援室及び学生相談室と連携して支援することで、学生の自立性の向上を図る。
- アドミッションセンターに国際入試部門を新設した。同部門においては、組織を横断してアドミッションセンターと国際室が協力し、広報及びリクルーティング戦略と入試実施が一丸となった体制を構築し、海外からの留学希望者等のニーズを踏まえたアドミッションの実現に取り組む。

教育改革関連

1. 総合学域群での学生受け入れを開始

令和3年度学群入試から体育専門学群を除く全学群・学類の定員の一部において、総合選抜を導入した。従来の入試は、受験時に学群・学類を決める方式であったが、総合選抜では「文系」「理系Ⅰ」「理系Ⅱ」「理系Ⅲ」という学群・学類よりも幅広い区分で選抜する。総合選抜で入学した学生は総合学域群に所属し、入学後の1年間は英語をはじめとする外国語や情報・体育などの基礎科目のほかに、様々な分野の専門導入的な科目を学ぶ。1年次の終わりに本人の志望と入学後の成績などに基づいて、2年次以降に所属する学類・専門学群(移行先)が決まる。学生が将来の進路を1年間の学修状況や学問的興味関心に応じて決定できるようになり、Late Specializationによる柔軟かつ多様なアカデミック・パスが実現する。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

1. グルノーブル・アルプ大学に筑波大学グルノーブルオフィスを設置

Campus-in-Campus (CiC) 協定校であるグルノーブル・アルプ大学 (UGA; フランス) とは、教育、研究を始めとした多くの分野において連携が活発化しており、今後更なる連携の強化が期待される。これらの連携活動を一層加速するため、また、CiCのハブの機能を担うトランスポーターな教育研究活動の展開を支援するため、3月24日に本学の13か所目の海外拠点となるグルノーブルオフィスをUGAに設置した。本拠点は、UGAを含むフランス国内の大学・研究機関との交流はもちろんのこと、ヨーロッパ南部の大学・研究機関との交流についても支援を行う。

2. オンライン科目履修生の受入対象となる協定校の範囲を拡大

令和2年度にオンラインにより履修可能な本学の授業科目をCiC協定校向けに公開したが、令和3年度からはこれらの科目をCiC以外の協定校にも公開した。令和4年3月までに、82名をオンライン履修生として受け入れた。

■ 国際的評価の向上につながる取組(タイプAのみ)

1. 筑波大学と日本貿易振興機構(ジェトロ)が包括的連携推進協定を締結

8月、学術研究、人材教育及び産学連携等の各分野において、国際的な展開を相互に連携推進することを目的に、ジェトロと包括的連携推進協定を締結した。これにより、国際産学連携によるイノベーションの創出や大学発ベンチャーの成長による地域エコシステムの発展、高度グローバル人材の育成及び定着による世界に開かれた地域の形成などといった方面での成果が期待される。



(包括的連携推進協定の調印式の様子)

2. URAが中心となり、CiC協定校との共同研究マッチングに向けた会合を開催

本学と5つのCiC協定校(グルノーブル・アルプ大学、国立台湾大学、マレーシア工科大学、オハイオ州立大学、ポーフォーム大学)との間で、URAが中心となった共同研究候補の発掘及びマッチングを行う会合を実施した。URA同士の交流は今までにない試みであり、研究者をサポートするリサーチ・アドミニストレーターとしての客観的な視点が加わることによって、マッチングの成功率の向上や研究ファンドの獲得といった成果が期待される。

3. 筑波会議2021及びTsukuba Global Science Week2021をオンラインで開催

9月、第2回となる筑波会議2021をオンラインで開催した。メインテーマとして“*Inclusive Innovation for the New Normal*”を掲げ、若手研究者等がノーベル賞受賞者や台湾のオードリー・タン大臣を交えて活発な討議を行った。全40セッションのうち、本学は15のセッションを実施した。世界77か国の940機関から約3,000名の参加登録を受け付けた。

また、10月から11月にかけて、筑波会議2021のサテライトイベントとして、Tsukuba Global Science Week (TGSW) 2021を実施した。昨年度に引き続きオンラインで開催し、国外参加者数が2,500人、国外参加機関数が1,100に上るなど、かつてない規模の参加者を得た。

【海外の大学との連携の実績(タイプAのみ)】

1. グルノーブル・アルプ大学において、長年にわたる活発な交流活動が認められ、本学が最重要パートナー校の一つとして選ばれた。それを受けて、教育(DDP等)および研究面における各分野での連携を一層促進させることを目指し、同大学との間にStrategic Committeeを新たに設置した。

■ 自由記述欄(取組について自由にアピールしてください)

1. さくらサイエンス・ハイスクールプログラムのウェビナーを開催

6月、日本の科学技術を紹介する「さくらサイエンス・ハイスクールプログラム」の一環として、高校生を対象としたグローバルウェビナーを科学技術振興機構(JST)と共催した。今回のウェビナーのテーマは「Philosophy meets Technology」であった。本学の総合理工学位プログラムの紹介をはじめ、「ヒューマンエージェントの相互作用」と題したトークライブや「テクノロジーで拡張する人文学」の講義ムービー上映などを実施し、海外の高校生ら約5,300名が視聴した。



(さくらサイエンス・ハイスクールプログラムの様子)

2. 東京オリンピック事前キャンプとしてスイス選手団約50名を受け入れ

7月、東京五輪に出場するスイス選手団約50名の事前キャンプを受け入れた。受け入れ時に対応するアテンドスタッフは学生を中心として募集し、人間総合科学学術院スポーツ国際開発学共同専攻(IDS)やつくば国際スポーツアカデミープログラム(TIAS2.0)、柔道部、陸上競技部の学生等30名がサポート業務を行った。スタッフとして参加した学生からは、「アテンドを通じて、今までの語学学習では学ぶことができなかった失敗を恐れずにコミュニケーションをしていく姿勢が身についた。今後の国際交流の場面でも、まずは伝えたいことをきれいな英語で伝えようとするのではなく、ジェスチャーを使ってでもなんとか伝えたいというスタンスを大切にしたい。」といった感想が寄せられた。